ISSN 1881-3496

九州大学
大学文書館ニュース

第29号　2007. 3.31

目　次

九州大学女子卒業生の会「松の実会」……2
南山大学史料室について……4
九州大学大学文書館委員会名簿……6
九州大学大学文書館名簿……6
大学文書館日誌抄録……6

九州帝国大学工科大学本館（旧本館。大正年間）

九州帝国大学工科大学の建物の多くは古河虎之助の寄付によって造られたが、なかでもこの本館（旧本館）は最大規模のものであった。1911年（明治44）12月に起工、1914年（大正３）３月に竣工した。煉瓦造２階建延２千246坪、工費31万２千799円。建築設計および工事監督には当初文部技師矢島一雄が当たり、のちに倉田謙に替わった。文字通り工科大学の中心的建物であったが、1923年（大正12）12月26日、火災により全焼した。しかしその後の調査で、同建物の煉瓦や礎石等はなお使用に耐え得ることが判り、再利用されることになった。現在の本部事務局、旧文部省工事事務所が旧本館の材料の一部を使って建てられている。

九州大学女子卒業生の会「松の実会」

野　口　郁　子

九大を卒業した女性たちの同窓会「九州大学女子卒業生の会」が発足したのは昭和43年（1968）ですから、来年2008年には40周年を迎えることになります。筆者は昭和39年卒業で同会の会員です。近年、世話人会に参加するなどの経験はありますが、「九州大学女子卒業生の会」の創設には直接にかかわってはおりません。従って、同会誕生のいきさつなどについては諸先輩の話や資料に基づいて書くことになります。

薬学部への「女子規制」が発端

「九州大学女子卒業生の会」の創設は、薬学部への女子学生の入学を規制しようという大学の意向に対する女性の卒業生や在学生の反対運動から始まりました。「松の実会」の名称は1984年九大のロゴマークが松葉であることにちなんで付けられたということです。

当時の時代背景としては、戦後20年余を経て男女共学という考え方が次第に当たり前になりつつあり、大学への女性の進学も増え始めていました。とはいえ４年制大学への女子の進学率は、昭和40年は4.6％（男性20.7％）、同45年は女子6.5％（男子27.3％）でした。ちなみに平成17年は女子36.8％、男子51.3％です。

世間ではまだまだ「男は仕事・女は家庭」の役割分担意識や「男性主・女性従」的な風潮が根強く、実際、私の卒業した文学部では大学の掲示板にはられる求人案内には「男子のみ」という但し書きばかりが目立っていました。

卒業しても「大学は出たけれど」、女性は公務員や教師、少数の民間企業以外に仕事を見つけることは難しく、大学で学んだ知識や専門技術を社会に生かす機会は女性にとっては限られていました。大学は花嫁大学か、高い国費を使って大学で学んだ知識を社会に還元しないのは国費の無駄遣いだと「女子学生亡国論」が東京のある大学教授から挙がったりしました（昭和37年）。

そんな時代の中で、薬学部は専門知識や資格を生かして、専門職としての仕事を続けられ、自立できる学問を学ぶことができるということで女性に人気の高い学部であることは今も同じようです。薬学部の昭和40年入学生のうち女子が63％、41年は73％、42年は60％と過半数が女子学生でした。このような入学事情は全国の国立大薬学部でも似たような状況にあったためか、同41年秋、女子学生の受験を規制しようとする動きが国立大学（熊本大、九州大、富山大など他）で出てきました。

昭和41年（1966）11月29日の西日本新聞は薬学部（薬学科・製薬化学科）の入試要綱について「九大薬学部でも『女子規制』」と大きな見出しで報じています。８段記事ですからニュース性の大きさを示しているようです。先に熊本大が同様な発表をしています。

同記事には「九大入試審議会は28日午後、『製薬化学科は学問の内容、将来の進路などの関係から男子学生に適する』と明記することを決めた」とあり、「教室の研究員などの後継者不足などから①学科別の選考②製薬会社など生産部門へ進む学生を養成する製薬化学科は男子が望ましい」など薬学部教授会の要望が認められた、としています。

このような大学側の動きに敏感に反応したのが女性の卒業生や在学生たちでした。「九州大学女子卒業生有志懇談会」がたちあげられ（第１回懇談会には58人参加）、大学当局への女子学生規制中止の要望書提出などをしています。

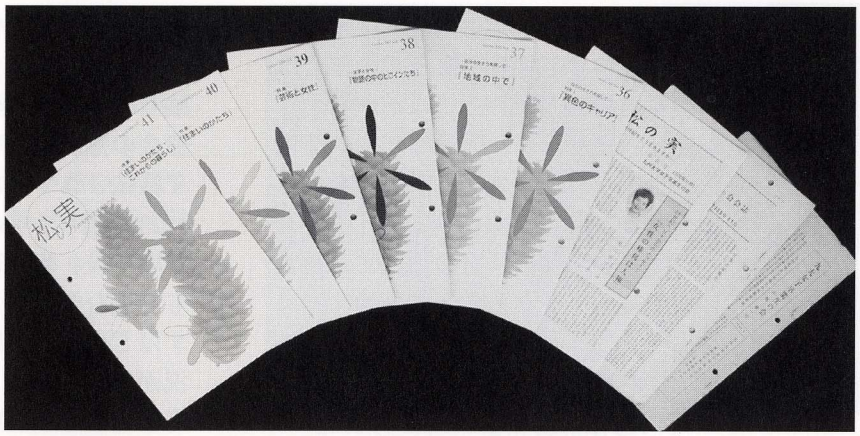
新聞もこの動きをとらえていて「女だってやれますワ　九大のＯＧ団結　入試規制に断固反対」の見出しで報じています（42年３月20日、西日本新聞）。

女性同士の激励・情報交換・ネットワーク

昭和43年（1968）４月３日に同懇談会が九州大学総長、薬学部長等に出した要望書には製薬化学科について、「『男子に適する』という注意事項がつけ加えられたことは、あきらかに女子の入学規制を意図したものであり、このことは、憲法が保障する教育の機会均等という基本的権利を奪うものであると考えます。これは単に、薬学部内の問題であるばかりでなく、最近とくにめだってきた女性の権利剥奪の動きの一端であります。このように女子を差別することは、戦前他に先駆けて女子の入学を認めた九州大学の栄えある伝統に汚点

を残すものといわざるを得ません」とあります。

このような抗議や署名活動は42年秋から43年にかけて全国でも起き、また入試のあり方に対して社会的な批判の声も出て、大学側は、以後はこのような措置はとらないと決定しました。



九州大学女子卒業生の会会報

薬学部への女子学生規制は廃止されましたが、男性と平等に勉強し、社会参加し、自立していく環境はまだまだ整ってはおらず、後輩女性への情報提供、女性同士の連携・ネットワークが必要と、有志懇談会は43年5月「九州大学女子卒業生の会」として、中村栄子さん（昭和28年、文学研究科修士課程修了）を初代会長にスタートしました。

それより2年前の昭和41年に女性の結婚退職制は違憲との初の判決が出されましたが、男女不平等の社会の意識や仕組みを是正する方向へやっと世の中が動き出した時代でした。差別をなくし男女平等を国も地方行政も企業も、もちろん大学も、あらゆる分野で進めていかなければならないと、国連が「国際婦人年」を定めたのが昭和50年（1975）です。男女平等への熱いうねりがようやく世界的に広がりはじめていました。日本でも、昭和60年「男女雇用機会均等法」公布、平成11年（1999）に「男女共同参画社会基本法」が公布施行されるなど、男女共同参画は「21世紀の我が国社会を決定する最重要課題」（同基本法前文）として、今や大学でも行政でも企業でも男女の能力を平等に生かすことに異論が唱えられることはありません。

九大のホームページを見ていると、九州大学でも、男女共同参画室の創設（2006年）、「九州大学の男女共同参画推進について」の指針が出され、女性研究者支援プログラム、出産・育児期研究助成制度などが設立されているそうです。女子卒業生の一人としてとても嬉しいことです。

リーダーとして活躍する「松の実会」会員たち

現在、「松の実会」は九大同窓会連合会に正会員として認められ、事務局を福岡市・天神にある「学士会福岡支部」の一隅に置かせていただいています。ホームページも開き、会からの情報提供や会員同士の活動報告や情報が全国から集まっています。九州大学のホームページからもリンクしてみることができ、九大の関連企画の情報提供などもしています。また母校・九大の研究事業との連携もでてきました。昨年度は、文部科学省助成の「同窓会組織との連携による女子理系進学者ロールモデル明示プラン」（研究代表者・九大総長）の実施にあたり参加協力しました。同窓会の新たな方向性の一つとして期待しています。

学部ごとに2年ずつ世話人会を担当し、年1回の総会と記念行事の企画・運営、会報「松の実」の発行などをします。総会・記念行事にはほとんど毎回、九大総長や副学長、学部長の方々に来賓として出席していただいています。

毎年の総会記念企画は各学部の特色が出て大変興味深い行事が続いています。

例えば、近年のことでは、教育学部担当の年には「異色のキャリア～自分の生き方を探して」をテーマにしたシンポジウム。文学部が担当した平成15・16年には、文学部卒業生の研究者たちを講師として「お楽しみ文学寄席～物語の中のヒロインたち」、「お楽しみアートサロン」と題する複数講師によるミニ講演会を実施しました。

工学部が担当した17・18年には「住まいのかたち」、「住まいのかたち・これからの暮らし」をテーマにパネルディスカッションといった具合です。19・20年は農学部担当ですが、どんな企画が出てくるか楽しみです。

このような企画を通して実感することは、九大の卒業生がいかに専門分野や地域で活躍・貢献しているかということです。大学で学んだことを核にその後の人生で大きく育て、生かしている方がほとんどです。卒業生同士のネットワークがさらに地域に仕事に社会に輪を広げています。私事で恐縮ですが、私も仕事をする上で、「松の実会」人脈に大変お世話になりました。

時は移り、大学で学ぶ女子学生の比率は年々上がり、九大の18年度の学部学生の女子学生割合は文学部で70%、薬学部50%というのは前から余り変わらないかもしれませんが、医学部46%、芸術工学部34%、21世紀プログラム63%などの数字をみても、能力や資質に男女差はないということを裏付けているようです。女子学生の活躍する現実を踏まえて、数年前には「女子学生亡国論」ではなく「女子学生興国論」を説いた本も出版されるという時代になりました。

このような時代変化のなかで、「松の実会」の存続の意味があるのだろうかという投げかけが何度か提起されましたが、そのつど「まだ女性の研究や労働環境、仕事と家庭の両立には厳しいものがある。女性のネットワーク作りにより互いに激励し合い、情報交換を行なうなど女子卒業生の同窓会の意義は小さくない」との声が強く、今日まで継続されてきました。

21世紀も7年の歩を進めた平成19年（2007）の年明け後、現職の厚生労働大臣から「女性は子どもを産む機械」という発言がなされ内閣を揺るがすほどの大きな問題となりました。このような状況があるからこそ、「松の実会」の存在意義はまだまだなくならない、ということでしょう。

（昭和39年文学部卒。元西日本新聞記者・前福岡市男女共同参画推進センター・アミカス館長）

南山大学史料室について

永井英治

南山大学史料室設置の経緯

南山大学史料室は2005年4月1日付で設置された。南山大学は名古屋キャンパス（名古屋市昭和区山里町）と瀬戸キャンパス（瀬戸市せいれい町）の二つからなり、南山大学史料室の主な活動は名古屋キャンパス内に設置された史料室で行なわれているが、瀬戸キャンパスにも分室が設けられている。これは、南山大学史料室の設置の経緯・目的と大きく関わっている。

2004年6月、「大学史料室検討プロジェクトチーム」が編成され、史料室を設置して、非現用となった大学事務文書を収集・保管することの重要性が議論された。この背景には、南山大学文書保存規程に基づいて保存年限を過ぎた文書が廃棄されてきたことへの危機感があった。また、南山学園が2007年に創立75周年を迎えることから、記念誌の編纂が進められ、叙述の根拠となるべき文書・記録の保存状況の調査が南山大学など南山学園を構成する各単位校で実施された。この調査により、南山大学の場合では南山大学文書保存規程がほぼ忠実に遵守され、保存年限を経過した文書・記録が廃棄されてきたことが明らかとなった。プロジェクトチームは、このような事態を改善するため大学史料室の設置を提言した。

南山大学史料室の役割(1)

南山大学史料室は、このような経緯を経て設置されたため、非現用文書を収集・保管することが重要な目的のひとつとなっている。また、永久保存とされる文書・記録の中には、担当事務課室の日常業務において参照されることがほとんどないものも少なくない。大学内の文書・記録の保管状況を調査した際、調査が終わった倉庫にしばらくしてから入ったとき、調査後に持ち込まれた未見の文書・記録が見出された。それらは永久保存の対象であったが、偶然に「発見」されることがなければ、死蔵され続け所在情報も不明になっていたものと想定される。

そこで、永久保存の対象となる文書・記録においても、担当事務課室の判断により南山大学史料室への移管が可能とされた。現状では、史料室の外からアクセスできる目録はないが、収集、移管された文書・記録はデータベースに登録されるとともに、移管史料目録を旧蔵事務課室に提供し、業務上の利用を妨げない措置を講じている。このように、南山大学史料室は設置母体である南山大学のarchivesとしての機能を果たすことが重要な目的のひとつとなっており、瀬戸キャンパスで作成された事務文書は瀬戸キャンパスで保存するという判断から分室が設置されたのである。

以上から明らかなように、南山大学史料室は、南山大学における業務上作成された文書・記録のうち、非現用となったものを移管し、整理・保管する役割を担っており、しかも、これが史料室の

業務に占める割合はかなり大きい。南山大学史料室は、私立大学よりも国立大学法人に設置されたarchivesに近い性格を持っているといえる。現状では、南山大学史料室に特定のコレクションというべき史料群はほとんど保管されていない。私立大学のarchivesに多く見られる創設者や建学の精神に関する史料群は、明示的なまとまりとしては保管されていないのである。

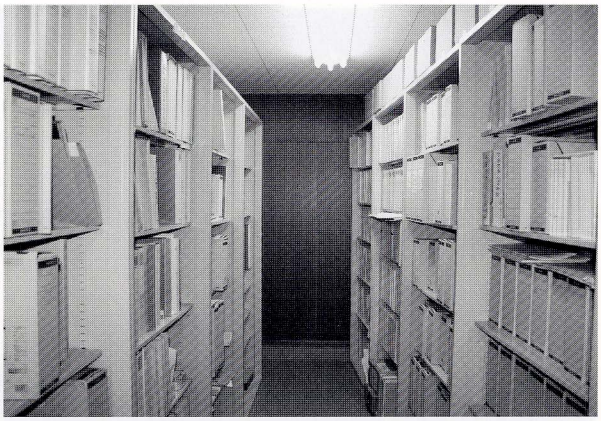
南山大学における史料の状況

南山学園は、1964年11月に『南山学園の歩み』と題する小さな年史を刊行している。これは、南山大学職員の松風誠人氏が独力で著したものであり、旧制南山中学校の設置から戦後の名古屋外国語専門学校（設置時の名称は南山外国語専門学校）を経て南山大学の設置に至るまでをコンパクトに叙述している。松風氏の作業は『南山学園の歩み』以後にも及び、南山大学と前身校である名古屋外国語専門学校に関しても、かなりの史料が集められたものと推測される。また、オリジナルは散逸し、今日では松風氏の筆写でしか知りえない史料もある。現在、南山学園法人事務局史料室（名古屋市昭和区五軒家町に所在）に所蔵されるそれらの史料と筆写からは、松風氏が学内外からさまざまな史料を収集していたことがわかる。逆にいえば、松風氏の作業の段階においても、まとまりのある史料群はほとんどなかったのである。

南山大学は新制大学として始まっており、直接の前身校というべき名古屋外国語専門学校も戦後の設置である。大学としての歴史は半世紀をわずかに越える程度である。この歴史の短さが、時の経過による評価選別を潜り抜けて形成された史料群を作り出すに至っていないということもできよう。しかし、そのような史料群のもととなる文書・記録は、何らかの業務もしくは営為の過程で作成されているのであり、それらのうち、ある特定の見地から意図的に選別・保存されたものが史料群として明示的なまとまりをもつものと認識されることになる。南山大学では、そのような史料群の形成＝選別・保存がなされてこなかったとみることもできよう。

南山大学史料室の役割(2)

南山大学史料室が担うべきもうひとつの重要な役割は、南山大学の歴史に関する史料の収集である。ここでは、大学のアイデンティティを歴史に確認するための素材を提供することが期待されて



南山大学史料室

おり、「大学史料室」という名称はこの役割に相応しい名称であるかもしれない。この役割は、さらに一歩進めれば、南山大学の歴史を明らかにする作業となる。現在、南山大学史料室は、南山学園創立75周年記念誌の編纂における南山大学に関係する部分の編纂業務にも携わっている。これは、学園史という枠の中で南山大学の歴史を明らかにする作業である。この中で、学園史執筆者の協力を得て、これまでの南山大学史の中でほとんど触れられてこなかった部分が解明されつつある。

南山大学は、2001年に『南山大学五十年史』を刊行した。この編纂では十分な史料収集はできなかったが、それでも、学内から廃棄を免れないような文書・記録が収集され、教職員・同窓生からの史料の提供もあった。それらの史料は『南山大学五十年史』刊行後、散逸こそしなかったが、一時ほとんど死蔵状態にあった。これらの史料を利用可能な状態で保管し、さらに新たな史料の収集を行なっていくことが南山大学史料室のもうひとつの重要な役割である。このように、南山大学史料室では大学史・学園史との関係を重視しているのである。

史料収集では、教職員の退職・異動時を狙って史料提供の呼びかけを行なっている。これには二つの目的がある。ひとつは、事務文書を補完する備忘録、欠落した事務文書の補填である。近年のことでも、会議録などが作成されない少人数の会合のメモ類は問題の核心に触れる重要な史料となる。もうひとつは、大学の管理・運営に直接結びつかない教育・研究に関する史料収集への期待である。この成果の一例として、2005年度、退職予定の教員から、ガリ版刷りを多く含んだ、学生の課外活動で作成された印刷物の寄贈を得たことが挙げられる。それらは、文学部哲学科とともに、

2000年度に人文学部人類文化学科に改組した文学部人類学科のかつての学生たちを中心にした課外活動団体のフィールドワークを記録したものであり、教員や大学院生の指導・助言などを得ながら行なわれた学生の主体的な学習活動の成果である。南山大学は、戦後初期に人類学の専門課程を持っていた数少ない大学のひとつであり、これらはまさに南山大学であるがゆえに生まれた史料ということができる。そこから、大学のカリキュラムとは異なる場で、学生の間に伝えられた南山大学の人類学の学風を読み取ることもできよう。これらは、特徴ある史料群ということになる。

以上、南山大学史料室の役割を大きく二つに分けて述べたが、実際には、この二つの活動は截然と区分されるものではない。南山大学の歴史は日々累積され再構築されていくのであるから、直近の非現用文書も南山大学の歴史を解明するための史料となる。また、教職員から提供された史料は、南山大学の業務を明らかにするものともなる。特徴的なコレクションを持たないところから出発した南山大学史料室は、史料の保存情況に規定されるところもあって、移管・収集史料の総体を南山大学のアイデンティティを確認するための素材と位置付けている。課題は山積しているが、史料を収集・整理・保管すること、そのための手続きを整備することから、南山大学史料室の業務は始まっているのである。

（南山大学史料室）

九州大学大学文書館委員会名簿

委員長	理事	副学長	有川	節夫
委員	人環院	教授	新谷	恭明
〃	人文院	助教授	山口	輝臣
〃	農院	教授	江頭	和彦
〃	情基セ	教授	藤野	清次
〃	芸工院	助教授	北村	賢介
〃	医院	教授	吉田	眞一
〃	歯院	教授	前田	勝正
〃	比文院	教授	有馬	學
委員	言文院	助教授	高橋	勤
〃	総理工	教授	島ノ江	憲剛
〃	応力研	助教授	山本	勝
〃	産連セ	教授	湯本	長伯
〃	博物館	館長	嶌	洪
〃	総務部	部長	松本	次好
〃	図書館	部長	濱崎	修一

（2007年３月１日現在）

九州大学大学文書館名簿

館長	理事	副学長	有川	節夫
副館長	人環院	教授	新谷	恭明
専任教員		教授	折田	悦郎
兼任教員	人文院	教授	佐伯	弘次
〃	法院	教授	植田	信廣
〃	法院	教授	熊野	直樹
〃	経院	教授	荻野	喜弘
〃	比文院	教授	有馬	學
兼任事務職員	総務課長		塩田	剛志
〃	法令審議室長		百﨑	義隆
〃	総務第二係長		長戸	謙一
事務職員			山中	一男
事務補佐員			松尾	陳代
〃			筑紫	啓子

（2007年３月１日現在）

大学文書館日誌抄録（2006年７月～2006年12月）

７．４（火）工学部電気情報工学科図書室より資料寄贈（８月29日も同様）。

７．６（木）大学院比較社会文化学府研究生、資料調査のため来館（８月30日、９月４日、８日、12月26日も同様）。

徳島新聞社より九大フィルハーモニ

ーオーケストラの歴史の件につき照会、回答。

7．7（金）江淵一公元教育学部教授より資料寄贈。
大学院人文科学研究院特任助手、資料調査のため来館（7月26日、8月8日、23日、9月8日も同様）。

7．10（月）富吉建周九州産業大学国際文化学部教授来館、資料寄贈。

7．12（水）「大学とはなにか―九州大学を通じて考える―」の一環として、箱崎地区（キャンパス）見学を実施（折田教授説明）。
新キャンパス計画推進室より資料調査のため来館（7月14日も同様）。
六本松地区事務部より資料受領。

7．18（火）「第6代総長荒川文六展」を開催（～8月10日。於中央図書館2階常設展示コーナー）。
第4回百周年記念事業専門委員会開催（折田教授出席）。

7．19（水）文学部美学・美術史教室より資料調査のため来館（肖像画の調査・撮影等。9月6日も同様）。
総務部総務課広報担当より工学部本館等設計者（倉田謙）の件につき照会、回答。

7．21（金）九州史学研究会より資料調査のため来館（8月23日、10月16日、18日、24日も同様）。

7．26（水）広島国際大学社会環境学部講師、資料調査のため来館（8月7日も同様）。

7．28（金）百周年記念事業推進室より資料閲覧のため来館（8月1日も同様）。
朝日新聞社より電話取材（旧制福岡高等学校現存建物の件。8月2日も同様）。

8．7（月）西日本新聞社より電話取材（箱崎キャンパスの歴史の件。8月9日、21日、9月24日も同様）。

8．9（水）江頭和彦農学研究院教授より資料寄贈。

8．11（金）読売新聞社より電話取材（箱崎キャンパスの歴史の件。8月21日、9月11日、12日も同様）。

8．22（火）九州史学研究会に資料貸し出し（2006年度九州史学研究会大会「『九州史学』のあゆみ」展のため）。

8．23（水）大阪大学大学院経済学研究科学生、資料調査のため来館。
大学院工学研究院地球資源システム工学部門より資料寄贈。

8．24（木）大学院工学研究院知能機械システム部門より資料寄贈。

8．25（金）出水薫法学研究院教授一行、大学文書館視察のため来館。

8．27（日）折田教授、九州史学研究会近現代史部会に参加（於文学部会議室）。

8．28（月）国際交流部国際交流課より資料受領。

9．4（月）総務部企画課より資料受領。

9．12（火）工学研究院材料工学部門より資料寄贈。

9．14（木）システム情報科学研究院情報理学部門より資料寄贈。

9．15（金）西日本新聞社記者、取材のため来館（医学部建物の件。19日も同様）。

9．16（土）折田教授、第50回教育史学会大会に参加（～17日。於大東文化大学板橋キャンパス）。

9．25（月）福岡県粕屋郡志免町教育委員会より資料調査のため来館。

9．26（火）工学部等事務部総務課より資料受領（27日、10月2日も同様）。

9．27（水）医学部保健学科より資料受領。

9．29（金）大学院生物資源環境科学府学生、資料調査のため来館。

9．30（土）『大学文書館ニュース』第28号刊行。

10．2（月）経済学部卒業生、大学文書館視察のため来館。

10．4（水）第1回百周年記念事業専門委員会百年史編集ワーキンググループ開催（折田教授出席）。
九州工業大学附属図書館史料室より資料調査のため来館（11月15日も同様）。

10．5（木）九州大学ホームカミングデイ実行委員会開催（折田教授出席。10月10日、17日、26日も同様）。

10．6（金）第1回百周年記念事業専門委員会募金ワーキンググループ経理部会開催（折田教授出席）。

10．16（月）大学院人文科学府学生、資料調査のため来館（10月18日、27日、11月1

日、10日、17日、20日、22日、24日、12月11日も同様)。

10. 17（火）学校法人福岡女学院本部総務課資料室より大学文書館視察のため来館。

10. 18（水）二見剛史志學館大学名誉教授来館、資料寄贈。

10. 20（金）森山優静岡県立大学国際関係学部講師来館、資料寄贈。

10. 21（土）折田教授、2006年度九州史学研究会大会に参加（～22日。於九州大学国際ホール）。
「『九州史学』のあゆみ」展に資料を展示。

10. 23（月）農学部卒業生、資料調査のため来館。

10. 26（木）工学部名誉教授、資料調査のため来館。

11. 6（月）第5回キャンパス計画及び施設管理専門委員会箱崎地区ワーキンググループ開催（折田教授陪席。12月12日も同様）。

11. 8（水）折田教授、2006年度全国歴史資料保存利用機関連絡協議会全国大会及び研修会に参加（～10日。於岡山衛生会館）。

11. 10（金）中山宏明名誉教授来館、資料寄贈（12月11日も同様）。

11. 13（月）大濱徹也北海学園大学大学院文学研究科教授、大学文書館視察のため来館。
キャンパス計画及び施設管理専門委員会箱崎地区ワーキンググループ長宛に「跡地地用計画に対しての大学文書館の要望について」提出。

11. 14（火）筒井眞氏より資料寄贈。

11. 16（木）早稲田大学大学院文学研究科学生、資料調査のため来館（～17日）。

11. 17（金）鵜木奎治郎千葉大学名誉教授、大学文書館視察のため来館。

11. 22（水）六本松事務部より資料寄贈。

11. 30（木）北海道大学大学院工学研究科助手、資料調査のため来館。

12. 2（土）折田教授、西南学院大学第2回大学改革フォーラム（寺崎昌男東京大学・桜美林大学名誉教授講演会）に参加（於西南学院大学）。

12. 3（日）「ホームカミングin六本松」の一環として、「九州大学の歩み写真展—創設から伊都キャンパス誕生まで—」開催。

12. 26（火）学務部キャリアサポート室より資料移管。

12. 27（水）総務部総務課広報担当より資料移管。

九州大学大学文書館ニュース　第29号

Kyushu University Archives

発行日　2007年3月31日（年2回刊）
編集
発行　九州大学大学文書館
〒812-8581 福岡市東区箱崎6－10－1
電話・FAX　(092) 642-2292
印刷　株式会社ミドリ印刷